

れるが、文献史料から見た場合、塀が瓦葺きに改修された年代と三葉文系軒平瓦を使用している建物の年代（註13）はほとんど変わらず、近世土浦城に伴う瓦の生産と流通に新たな疑問が提起されることとなった。もちろん板塀瓦のすべてを分析したわけではないので、今回分析を行わなかった資料の中に三葉文系軒平瓦と同じ組成を持つ「古い」板塀瓦が存在する可能性もある。今後の研究の課題としたい。

## 追記

今回出土した軒平瓦（18）は江戸遺跡で確認されている加藤氏分類のⅠA a類と推定される資料である。ⅠA a類の瓦は加賀藩本郷邸跡出土例などから1650～1670年頃のものと考えられており、今回の三葉文系軒平瓦と同じく江戸前期の瓦の流通を示す資料として非常に重要である。

## 2. かわらけについて

今回の発掘調査では、土塁やその下の土層より比較的まとまった数のかわらけが出土している。これらのかわらけについては各層位ごとの帰属は比較的明確であることから相対的な先後関係については判断しやすいが、各層位ともかわらけ以外の遺物に乏しく、特に陶磁器などの年代判定の基礎になるような資料がほとんど共伴していないので、今回の出土資料から年代を判定することは難しい。そこで、今までの土浦城跡の出土資料や周辺遺跡の出土資料などから、今回出土したかわらけの位置付けを考えてみたい。

まず今回出土した一群の基本的特徴としては、体部がロクロ成形で底部が回転糸切り無調整、体部は直線的ではあるが軽い稜を持ちやや内湾する器形であることが共通している。なお、このような基本形態は下総から常陸南部で確認されるかわらけとは共通する特徴と考えられる。大きさについては、口径からは概ね大（約10cm超）、中（約8～9cm）、小（約7cm弱）の3グループに大別できるが、ただし大に該当する資料は少なく分布の中心は中と小である。底径については概ね4～5cm前後のものが多く、形状については各層位ごとのあまり大きな変化は見られないが、下層の第Ⅰ期層出土資料より上層の第Ⅴ期層出土資料に向かって体部の直線化及び口縁部の肥厚傾向が増す方向へ進んでいるものと考えられる。なお、亀城のシイ表採資料（第49図-52・53）は他の資料に比べるとやや口径対底径の比率が大きい。また葺石面出土資料（第45図-2）は逆に比率が小さく、形態も他のものとは大きく異なっている。

次に他の出土資料との対比について考えてみたい。まず、いままでの土浦城跡の出土資料との比較であるが、土浦城跡では1985年の本丸・二ノ丸調査、86・87年の櫓門下の調査、88年の東・西櫓等の調査、93・94年の外丸御殿跡の調査時などにかわらけの出土が確認されている。その中でも櫓門下から出土した一群は、今回の調査場所に非常に近いことはもちろんのこと、前記第2章2の年表にも記載した1656（明暦2）年の櫓門の地鎮祭祀に伴うと考えられる点で非常に重要な資料である（註14）。この一群は、体部ロクロ成形や回転糸切り無調整の底部はもちろん、全体的なプロポーションや細部の調整も今回の出土かわらけとは非常に良く似ている。詳しく観察すれば特に直線的な体部や口縁部が丸めでやや肥厚する形状等には、第Ⅴ期層出土かわらけとの共通点が見られる。

次の比較資料としてはつくば市の小田城跡の出土資料がある。小田城跡は鎌倉時代初期に常陸国守

護であった小田氏の居館に始まり、その後北畠親房を迎えた南北朝の戦いや、佐竹・結城氏などとの戦国期の争乱を戦った小田氏の居城として常陸南部の主要な城館である。1997（平成9）年度より整備のための発掘調査が継続して行われているが、その結果6面の遺構面が存在することが明らかとなっている（註15）。このうち3面以下の層位においては手捏ねかわらけが共伴しているが、上層に当たる1・2面からはロクロ成形で底部回転糸切りのかかわらけが共伴していることが確認されている。昨年真壁町において行われた真壁城跡・小田城跡等中世出土遺物の検討会において、この第1面および第2面の池跡覆土から出土したかわらけの一群の中に、今回の土浦城の第Ⅰ期層及び第Ⅱ期層出土のかかわらけとほぼ同一と考えられる個体が存在することを確認することができた。小田城跡の第1面及び第2面についてはどちらも多量の炭や焼土を含み火災痕跡を示す面で、戦乱・落城などを想起させる遺構面である。これらの面にはかわらけのほか陶磁器等の出土が確認されており、それらの遺物の年代として概ね16世紀中葉から後半頃の年代を示すものと考えられている。

この他の遺跡としては、同じくつくば市の手子生城跡出土かわらけも今回の土浦城跡出土かわらけと類似した資料である。この遺跡については共伴する陶磁器から16世紀末から17世紀前葉の年代が推定されている（註16）。それに対し真壁城跡出土かわらけについては形態に類似する点も見られるが、胎土の特徴が大きく異なることが確認されている（註17）。また概ね16世紀前半頃の年代を持つと考えられる近隣遺跡出土のかかわらけと対比した場合、ロクロ成形で底部回転糸切りである点には共通点があるが、比較的小さな底径や、やや丸みをもつ体部などは今回の出土かわらけとは明瞭な差異がみられる（註18）。

これらの遺物の様相より類推すれば、今回の土浦城跡出土かわらけのうち第Ⅰ～Ⅴ期層出土かわらけについては、年代が16世紀前半以前になるとは考え難く、広く捉えれば16世紀中葉から17世紀中葉頃に収まるものと考えてほぼ間違いないと考えられる。細かい年代を想定すれば、まず第Ⅰ・Ⅱ期層出土のかかわらけについては小田城跡第1・2面出土のかかわらけと同様と考えられることから、年代については同じ16世紀中葉から後半頃のものである可能性が想定される。次に第Ⅴ期層出土のかかわらけについては櫓門下出土かわらけと近似していることから、櫓門の建てられた1656（明暦2）年とあまり変わらない年代と想定することができる。史料から見れば第Ⅴ期層が土塁に盛られる可能性は、鐘楼が建てられたとする1620（元和6）年頃か、本丸の堀が瓦葺きに改修された1664（寛文4）年が考えられる。今回のかわらけを比較してみると、どちらかといえば櫓門下出土資料のほうが第Ⅴ期層出土資料より口縁端部の肥厚傾向がやや強いと思われるので、第Ⅴ期層出土資料は櫓門下出土資料よりも年代的に先行する可能性があるものと思われる。そしてⅢ・Ⅳ期層出土資料については、この両者の考え方に誤りがなければ、これらの間である16世紀末から17世紀前葉と推定することができる。この想定欠点としては、小田城跡第1・2面出土資料の中には17世紀初め頃の可能性を持つと思われる遺物も少量混入しているため、もし小田城跡第1・2面の年代に見直しが行なわれたり、比較対象とした遺物が混入と考えられた場合には、今回の第Ⅰ・Ⅱ期層出土資料の年代についても動く可能性が残されていることである。それでも最新年については変わらないと考えられるので、いずれにしてもこの各層出土かわらけの一群が17世紀前半から中葉までの年代から外れることはないと考えられる。

最後に層位出土資料以外の資料について考えたい。まず亀城のシイ表採資料については第Ⅰ期層出土資料と共通点もあるが、より稜が明瞭で口縁端部の肥厚傾向が少ないので、第Ⅰ期層出土資料に先行する可能性が残されている（註19）。ちなみにこのシイの樹齢は約450年と推定されているので、この年代が正しければ16世紀半ばということになる。葺石面出土については、形態はもちろん胎土の特徴も大きく異なるので、ほかのかわらけと同一の系譜で考えることは不可能である。推測ではあるが、江戸及びその周辺などの土浦城周辺地域以外で生産され、搬入されたものではないかと思われる。この遺物は葺石面の存続年代を推測するための重要な遺物であるが、今回類似資料が確認できなかったため年代その他については今後の課題としたい。

（註1）非常に大雑把な計算であるが、本丸（約100×50m）全周に今回の1・2期土塁（基底幅約6m・天場幅約3m・高さ約2m）があると推定すると土量は約2,700m<sup>3</sup>、東側だけに存在するとしても約450m<sup>3</sup>程度が必要ではないかと想定される。

（註2）文献には「石落」の記載があることから、理由として可能性が考えられる。

（註3）土浦市立博物館蔵。木塚久仁子氏によれば紙質・描写方法等からいわゆる『正保絵図』の正本に近い写本と思われるとのこと。詳細は巻頭図版1写真参照。

（註4）独立行政法人国立公文書館蔵。

（註5）国立国文学研究資料館蔵土屋家文書。製作年代については城周辺に居住する藩士の名前から木塚久仁子氏が推定。

（註6）『常州土浦城図』には鐘楼の表現がないが、必要がなかったためなど「あるものを描かなかった」可能性が高い。ただし「ないものを描く」ことは、基本的にはありえないと考えられる。

（註7）櫓門の解体調査を担当した一色史彦氏は「水切長押」の位置から柿葺きから瓦葺きへの改修を推定しているが、東・西櫓の復元設計を担当した神戸信俊氏は否定的見解をしている。

（註8）前澤家は土屋氏転封以前より土浦に居住していたと思われる家で、藩士として土浦藩に仕え大工や庭師などを拝命している。『諸士年譜』（土浦安藤家所蔵）に拠れば、前澤惣兵衛が1808（文化5）年に、惣兵衛没後に子の前澤源治が1840（天保11）年に藩より『瓦師』を拝命している。村松常子氏教示。

（註9）壬生城跡ではこの角棧板塀瓦のほか、丸棧板塀瓦も出土している。報告書によれば角棧のほうが近世でも新しい時期の遺構から出土する傾向があり、新しい様相の1つとして捉えている。詳細は『下野壬生城』参照。

（註10）板塀瓦は三之門左右の塀に使用されている。板塀瓦については筆者実見。なお三之門は明和年間（1764～72）に再建されたものであるが、明治20年頃に屋根等が改変されたと伝えられるので、あるいは塀の板塀瓦はこの時期のものか？

（註11）忍城の板塀瓦は本丸堀の第8層から出土している。この第8層の下部に浅間A軽石層の堆積が確認されていることから、埋没年代は1783（天明3）年以降と考えられる。なお忍城跡出土の板塀瓦には軒飾り状の垂れがあるものが見られる。詳細は『行田市郷土博物館研究報告』第1号参照。

（註12）拳母城の存続年代。詳細は『拳母城』参照。

（註13）三葉文系軒平瓦の使用が確認されているのは現存する櫓門、可能性が高いと考えられるのは東・西櫓である。これらの建物の建築年代は東・西櫓が1620（元和6）年、櫓門は1656（明暦2）年である。塀の年代は1664（寛文4）年または1645（正保2）年以前と考えられる。

（註14）詳細は『土浦城址内 櫓門保存修理工事報告書』1988参照。









（註15）詳細は『史跡小田城跡』1999参照。

（註16）詳細は桃崎祐輔『つくば市手子生城跡』『第17回遺跡研究発表会資料』1995参照。

（註17）真壁城跡出土かわらけの胎土には風化花崗岩を起源とする雲母や長石の粗い粒子が多く含まれている。詳細は『真壁城への誘い』1998参照。

（註18）ただし小型品のうち比較的大きめの底部と直線的な体部を持つ資料については、土浦城跡出土のタイプと比べても差異が少ない。

（註19）なお、この亀城のシイ出土資料は他のものに比べ口径／底径の比が大きい。

今回の出土資料	参考とする資料	位置付け（年代）
 (亀城のシイ表採)		
 (第Ⅰ期層)	 (小田城跡 第1・2面)	16世紀 中葉～後半頃 (小田城跡)
 (第Ⅱ期層)		
 (第Ⅲ期層)		
 (第Ⅳ期層)		
 (第Ⅴ期層)	 (土浦城 櫓門)	1656（明暦2）年 (土浦城櫓門)

第60図 土浦城跡出土かわらけの位置付け